総合都市研究　第62号　1997

東京都立大学大学院都市科学研究科博士課程設置記念講演会

都市科学研究の課題と方法について

日時　1996年10月26日（土）　午後1時30分～4時
場所　東京都立大学国際交流会館

講演会開催の趣旨

この講演会は、1996年4月の都市科学研究科博士課程の設置を記念して、都市科学の今日的課題をテーマに、斯界の第一人者を招いて学術講演会を催し、本学関係者、学生をはじめ、自治体職員、一般市民を啓発するとともに、本研究科博士課程設置の趣旨を広く周知し、併せて、本研究科への関係者の理解と協力を得ることを目的として開催したものである。

講演会は、都市科学研究科委員長高橋勇悦教授のあいさつに引き続いて、上記テーマのもとに、伊藤滋慶應義塾大学大学院教授と倉沢進人文学部教授から講演をいただいた。

都市科学研究科委員長のあいさつ及び講演の内容は以下のとおりである。

1．都市科学研究科委員長あいさつ
2．都市計画のニューフロンティア
3．都市科学への期待

高　橋　勇　悦*
伊　藤　　滋**
倉　沢　　進***

1．都市科学研究科委員長あいさつ

高　橋　勇　悦

きょうは、土曜日の休みの日にもかかわらず、多数おいでいただきましてありがとうございました。

きょうの講演会は、都市研究所の都市科学研究科の博士課程の開設を記念するという意味で開かせていただきました。都市科学研究科というのは、全国でも初めての大学院ということで、簡単に言えば、学際的、あるいは総合的な研究というふうに考えているわけですけれども、中身につきましては、正直言うと、たくさんの議論があって、決して整理されているような状況にあるとは言えないと、私は思います。都市科学、あるいは都市学、アーバノロジーなんていうことについては、かなり昔から、少なくとも昭和30年代後半以降からそういうような議論は出てきたかのように私は記憶

* 東京都立大学都市科学研究科委員長
** 慶應義塾大学大学院教授
*** 東京都立大学人文学部教授・元都市研究センター所長

しておりますし、現に私も、都市科学、あるいは都市学について議論に参加をした記憶がございます。なかなか難しい問題で、今までそれなりに議論を重ねてきている中で、しかし、まだ姿がはっきり見えないというのが現状だと思います。

ただ、そう言っただけでは、都市科学研究科と銘打っている以上は放っておけないというのが当然の我々の考え方ですので、少しでもその内実といったようなものを持つように努力しなきゃいけない。幸い、博士課程が開設されて、学生の諸君も入ってきて、これから一層、学生も増えるし、研究も広がる、そういう中でぜひともこういう議論をもっともっと活発にしていかなきゃいけないだろう、そういう趣旨で、きょうは、都市研究所としては初めてこういう計画を立てさせていただいたということになります。

きょうは、二人の先生をお招きいたしました。伊藤滋先生と倉沢進先生ですが、今さら改めてお二方の先生をご紹介申し上げることは多分ないだろうと思うんですけれども、伊藤滋先生は、ご存じのように、昔から日本の都市工学都市計画の分野においてリードをされてきた方と言ったらいいんでしょうか、そういう第一人者で、今日でもなおそういうふうな活躍を続けておられますので、皆さんもよくご存じの方だろうと思います。専門の領域だけじゃなくて、社会学関係の仕事もいろいろとなさっておりまして、非常に学識の幅が広い方であり、都市科学ということについてもおそらく、我々に教えていただくものは大きいものがあろうというふうに思っております。

それから、元都市研究センター所長の倉沢先生もご紹介をするまでもないだろうと思うんですが、ただ、一言申し上げておきたいのは、都市科学研究科をつくるということで、その開設に努力され尽力された一人がほかならぬ倉沢先生で、いわば今日の都市科学研究科の方向を決定づける上で非常に大きな足跡を残された方であり、したがって、都市科学の学問的な討議についてはそれだけの責任がある方と私は思っております。そういう意味で、ぜひお話をお伺いしたいと思っておりました。

そういうことで、きょうは、日本のというよりは、世界を代表するようなお二人の先生方をお招きしてお話をお伺いできるということは、我々にとっても非常に幸いなことであると思っております。皆さんとともに感謝をして、お礼を申し上げたいと思います。

私のほうからは、簡単ですが、ごあいさつにかえさせていただきます。

2．都市計画のニューフロンティア

伊藤　滋

都市計画を自分の専門として看板に出しておりますので、都市計画を再考するということでしばらく話をしてみたいと思っております。或いは、どんな気持ちを持って私は都市計画の現場の人たちと話をしているのか、そういうことを申し上げます。

都市計画という言葉には、昔は非常にかたい感じの内容がありました。つまり、都市計画とは何だと定義ができる内容があったのですが、今の社会ではそれがほんとうに薄くなってしまいました。昔の都市計画は区画整理にしても地域制にしても、住宅団地開発にしても、土地にしっかりと結びつき、その上に理想的な土木工作物や建物を造ることに終始していました。それが今では、住民参加とか都市の経営とか、ストリートライフの復活といった、非空間的課題が都市計画のなかにどんどん入ってくるようになりました。

20世紀の初めのときから 100年間の都市計画の変化は次のようにまとめられます。一等初めに都市計画を主張し、都市計画の専門家と自認していた人は、プロボケーターと呼ばれる人達でした。つまり、理想的な都市空間の改造を主張する社会思想の改革論者でした。次に第二次大戦後になりますと、都市計画家はテクノクラートになりました。ところが、今や都市計画家は大衆社会の中に埋没し、市民の政府に対する代弁者的役割を担うようになりました。こういう三つの変化をこれから話をすることになると思います。それだけなんです。

都市計画のプロボケーター

20世紀の初頭には理念的な都市計画を提起した数々の建築家やシビルエンジニアがいました。彼等を都市計画のプロボケーターと呼んでも良いでしょう。ここで2人の都市計画家の名前をあげてみます。1人はフランス人のトニー・ガルニエです。彼は『工業都市論』を書いた人です。そこに書かれている図面には、既に20世紀初頭に発生していた工場公害をさける都市像がえがかれていました。産業革命の結果、繁栄をきわめた工場の排煙をかぶらない高台のところに住宅地をつくろうというのが彼の提案でした。当時、工場の廃液は川に流すために、そして舟運の便もあって、川に近いところに工場地帯をつくるのが当時の都市の姿でした。丘の上に住宅地をつくる、それが20世紀初頭の工業を受け入れた都市の新しい姿であるという図面をかいたわけです。それは今の日本の都市にあてはめれば四日市がこの事例です。ところが、四日市は何が起こったかというと、四日市ぜんそくの大変なことが起きた。それは20世紀中頃の巨大化した工場の排煙は、都市計画家の想像を越えて、高台の住宅地を襲ったからです。

もう1人、ヒルベルザイマーという都市計画家がシカゴにおりました。彼はあまり有名な人ではないのですが、オーストリアにグロピウスによって設立されたバウハウスの先生でした。ナチズムに追われてシカゴに逃げて、ＩＩＴをつくり、そこで都市計画を教えました。彼は都市計画を超えて地域計画を図面に書きました。シカゴを起点として、アメリカ大陸中央部を南下し、メキシコ湾までミシシッピィ川沿いに広大な地域を設定し、そこに彼が理想とする住宅都市の帯を書ききりました。この規模は壮大で、そこに細かい住宅団地を書いたのですから、アーバンデザイナーであり、リージョナルプランナーでもあったわけです。その本が出版されたのは1950年ごろです。当時のアメリカは第二次大戦の勝利によって、国内の経済が拡大し、都市化が急激にすすんでいたので、彼の提案も社会的に拒否されなかったのです。

この2人が行った仕事を今評価すれば、彼等は都市を図案化して建築家や土木技術者に示したといってよいでしょう。私達日本の専門家に最も知られている欧州の都市計画のパイオニアは、エベネツアー・ハワードであり、ル・コルビュジエです。彼等も都市を図案化しました。もっともエベネツアー・ハワードはその新都市経営計画が大事な意味があるのですが、田園都市の図案のみが有名になりました。もちろん、それらはいいかげんな図案ではありませんでした。それぞれ自分の主張があってかいた図案です。しかし、それらの主張を過大に解釈することは、もはや現在の都市計画では必要としません。ところが、往々にして都市計画技術者、特に建築系の専門家はそれらを過大評価します。コルビュジエの考えは20世紀の都市観を変えたというようなことをいいます。それは全くナンセンスです。なぜならば、トニー・ガルニエにしても、ヒルベルザイマーにしても、あるいは、ル・コルビュジエですらも、一般大衆社会ではほとんど知られておりません。多分、アメリカ人もフランス人も知らないでしょう。そういう名前を使って、都市計画は某氏の理屈によればこうあらねばならないということを振りかざす都市計画の世界は、昔の話になったと考えるべきです。

そうかといって簡単に図案都市計画が消えないということも一面の真実です。それは何かといいますと、世の中の指導者といわれる年輩の人達は依然として壮大で象徴性の強い都市を欲しがるからです。年輩の政治家・学者達は首都移転で造られる新首都は森の中に埋め込まれるようにすべきだと主張します。それらの人達はこう言うのです。「役人は冷たい空気に頭をさらして、客観的で冷静であらねばならない。世俗のことにまみれると冷徹な判断ができなくなる。したがって、山の中に官庁のビルを埋めてゆき、それらは建設グループ、社会福祉グループ、教育グループという幾つかのクラスターに分けて配置する。それを道路でつないで、そのはるか向こうに住宅地がある。こういう都市にすべきだ。」これは要するに、オタワかキャンベラの話を持ち出しているなということです。キャンベラがほんとうに現代的なセンスでみていい街なのでしょうか。あの街を私はいい

とは思いません。キャンベラが都市計画で有名なのは、平面図面が図案として美しいからです。日本の都市計画の教科書には、1911年に行われたキャンベラ首都計画の国際コンペで当選した、ウォルター・グリイフィンの図面が必ずのせられています。これは非常にきれいな図案です。ですが、図案はあくまでも図案です。今のキャンベラの上空をヘリコプターで飛んでみれば、その図案の一部が実際の市街地として見れるかもしれません。しかし、そういうことまでしてキャンベラの都市計画の図案を確認しようというのは、建築写真の写真家ぐらいでしょう。

1956年に計画が決定されたブラジリアもその例にもれません。行ったことないので写真で見ている限りでは、オスカーニーマイヤーの自己満足的な宇宙型建築と、それを下支えするルツィオ・コスタの新興宗教的都市デザインは、普通の人々には全く無縁の世界です。キャンベラやブラジリアが首都建設の見習うべき先駆例であるといった言い方はとてもおかしいです。

つまり、これまでの新都市計画の空間像は、エンジニアリングと芸術とが融合したデザイン領域の作品でした。たとえば、前衛的な絵画とか写真は、その分野の先生がしかめ顔をして素晴らしいというと、普通の人はそうかなと思うのです。よく見なければいけないので、一生懸命見ていいはずであると自分に言いきかせるのです。実はよくない、くだらないと思っていてもです。これは半分正しくて、半分間違っています。つまり専門の世界に埋没してゆきますと、その世界の価値観は普通の世の中のそれと違ってくるのです。教育は一種の知的洗脳ですから、前衛絵画の支離滅裂さも現代芸術論のフィルターを通してゆけば、そこに素晴らしい思想がみえてくるのです。僕は、トーマス・マンの『魔の山』という長編小説を青年のときに読みましたが、3冊目位でくたびれて投げ出しました。しかし、これは実にいい哲学的文芸本です。専門家はそう言うのです。しかし、大衆社会では、そんなのをいいと言う必要はない。20世紀の末期になると、大衆社会は急速に知的になりましたが、それによって健全な「常識的判断」を大衆社会が明快にするようになったのです。

都市計画のテクノクラート

話は都市計画の大衆化という課題に入っていくことになります。今から40年位前、私が都市計画を勉強し始めたころは、都市計画とはまさに塗紙計画であって、さきにのべたプロボケーター達の都市計画像が氾濫していました。でも、若いときのことを思い出しますと、それによって私は都市計画に情熱を燃やすことができました。都市計画は若者に対して美しき幻想をいだかせる勉強分野でした。空間的幻想を論理的に記述すれば学問になります。先験的に組みたてられた幻想の都市空間像を論理的に説明するのが当時の都市計画でした。幻想を学理的に美しく展開するのが建築や都市計画です。あんまり美しく展開できないのは植物分類学かもしれません。

何で私は林学科を出て建築学科に学士入学をしたかという原因はこの分類学にありました。つまり、決定的に樹木学という植物分類学についていけなかったからです。樹木学の実習というのがありました。それは山の中に入って樹の枝と葉っぱを集め整理分類する仕事です。葉っぱの形や葉脈の形、そして小枝から葉がでてくるところの形、すべて葉と枝の形で樹木をみきわめるのです。これをやられたので、私は参ってしまいました。それから、土壌学というのもくたびれました。500ページぐらいの本に菌の名前が何百と出てくるんです。これは極めて学理的なんです。しかし、美しき幻想を我々に提供しなかった。だから、粘り強くない1人の生徒は、林学をやめて、建築にゆくことになりました。今でも都市計画の教科書の前半には美しい、しかし、実現しない都市空間像の図面が沢山のっています。

しかし、感性的な絵姿とその解釈だけで都市計画が構成されるのはおかしいよという疑問が若い研究者のなかから出てくるのは当然です。ある程度分析能力がある数学に強い青年が次第に登場してきました。土地利用計画の基本は、特定の土地利用がどの位の需要でどの場所を求めるのかという研究です。それは当然経済学の立地論や計量的

手法に結びつきます。道路の幅員をきめるのは、土地利用がひきおこす自動車の発生交通量です。これもＯＲ的そして統計学的手法を必要とします。要するに、これらはプロボケーターの領域ではない、都市計画に新しいテクノクラートが必要であるという主張が生まれてきたのです。これは昭和35年頃からです。世の中が所得倍増計画で代表されるように、急速に都市化・工業化されていった時代です。建物も道路も港も異常ともいいうる勢いでふくれ上がっていた時代です。その頃から都市計画ではシミュレーションという技術用語がひろがり始めました。それを聞いただけで、古い都市計画の先達方は動転しました。しかし、算術をやらないと物事の黒白は決着できないと思われている時代でした。都市計画でも、イデロギー論やデザイン論ばかりしているのではなく、計量的都市空間論を展開すべきだという発言が強まってきました。土木屋さんがやっているんだから、建築屋さんだってできるだろうというので、待ち行列とかゲームの理論を使った大変な地域モデルを使うことが始まりました。テクノクラート都市計画がこうして、東京オリンピック以降花盛りになってきました。

ちょっとさしはさまなければならない話がありました。それは昭和30年代、日本の都市計画は具体的に何をしていたのかということです。これは２つにまとめられます。ひとつは戦災復興区画整理であり、ふたつめは住宅団地をつくって庶民型集合住宅を建設することでした。この後者の分野の都市計画はどうしても社会階層論に結びつき、貧しき者のための住宅供給と都市建設というイデオローグ的な研究になりがちでした。シミュレーションという言葉が入ってくる直前の我が国の都市計画はこのように審美的な分野と社会改革的分野に二分されていたといえます。そこにシミュレーションとかテクノクラートという言葉が入ってきたのです。この言葉は社会資本の効率的な建設という命題に答える最適の技術用語でした。したがって、ここで土木的な都市計画がこの助けを得て主流となってくるのです。非常に陳腐な話ですが、今、都市計画とテクノクラートを結びつける一番いい技術用語は発生交通量です。この言葉を使って土木技術者は計量的に都市空間を決めてゆこうとしました。テクノクラートの誕生です。大衆が都市計画に近づくときに、テクノクラートが近づけないように間に入ってきてこう言います。「私たちがちゃんと、あなた方にわかるように、世の中をよくするようにいたします。間違いないから私達に任せなさい。」と言うのです。

その目的を達成すべく生まれたのが東大の都市工学科かもしれません。しかし、当時の教師がそれほど計量的技能に秀でていなかったので、世の中が期待するほどの計量的テクノクラートは出なかったと思います。河盛好蔵言うところのＢ級人間論にしたがえば、世の中を常識的に動かすことにたけた二流の人材をつぶをそろえて出している学科でしょう。ところで、先に述べたテクノクラートとして都市計画を専門とした人達は、学者・官僚をふくめて、東京オリンピック以降、昭和50年代までものすごく算術をいたしました。これはコンピューターの発達と無縁ではありませんでした。その最たるものが地域開発のための計量モデルです。これは地域と経済両方を統計学的に計量し、シミュレーションの技術で結果を出す都市計画上の手法でした。私もそういうことをやりました。学会としては、地域学会がこの領域を取扱っていましたが、地域を算術化する世界のプロボケーターとして、アイザードという先生がいました。この学問がどれだけ世の中の改善に貢献したかというと、残念ながらほとんど貢献をしなかったといってよいでしょう。アイザードとそのメンバーは神様の領域を分析しようという大それたことを考えたんじゃないかと、僕は思うんです。しかし、当り前の話ですが、この種の地域計量分析は一種の現状を説明する解釈学であったことに終り、新しい未来を展示するものではなかったのです。現状説明という点では古典的ですが、クリスターラーとかレッシュ、そしてチューネンの孤立圏といった抽象的立地モデルのほうが明快です。これらのモデルが提想された理由はドイツの地方都市とその周辺の農村地域にゆけばはっきり判ります。チューネンの孤立圏の絵姿そのものの農村が東ドイツに

あります。計算しなくたって絵面で話がわかる。しかし、アジアは違います。アジアには絶対にチューネンの孤立圏はできません。クリスターラー型の集落分布と都市の関係もできないでしょう。この間、僕はある討論会に参加したときにいみじくもこのことに言及したのは、コール・ハウスというオランダの建築家です。今、ハーバードの教授をしています。彼の建築のセンスは抜群にすばらしい。矩形の感覚を身につけています。その感覚が非常に研ぎ澄まされている。現在では、若き建築の学徒は、コール・ハウスというとただただ集まります。コール・ハウスは今、どこで仕事をしているかというと、東南アジアで仕事をしています。かなりの仕事をしています。

彼がその討論会で言ったことは次のようなものでした。欧米では城壁があったから、畑と城・街が切れていた。ドイツはきびしく切れているけれど、フランスは切れ方がぐずぐずしている。イタリアになると相当いいかげんだけど、基本的には切れていて、そのプリンシプルは変わらないわけです。ところが、彼が言うのに、東南アジアはそうじゃなくて、すべてがずるずるとつながっているのが原則である。自然と人工物とがばらばらっとまざり合いながら、ある領域に展開をしている。そこでは人工物同士だけではなく、人工物と自然物とのつながりもみられる。そこの中で人工物が多いところが街である。そういうふうに彼は認識するわけです。こういう認識の仕方をするとすれば、アジアには絶対にパターンニズムはあり得ないことになります。むしろ、旋転無碍に流動している、そういう一つの平面的な現象があって、たまたま神様のさじかげんで、仏様のさじかげんでどこかに都市がぽっとできて、そこからばらばらっと住宅がいいかげんに広がっている。しかし、いつも自然と溶け合っている。そういう形でしか地域を認識をできないです。そうなると、さきほどの地域学会的な話では、ヨーロッパやアメリカの都市がこうなっているという検証はできたとしても、東南アジアや日本ではうまく検証できないわけです。今になるとこのような話はできますが、昭和40年ごろは僕も一緒で、全部勉強をしました。要するに、欧米の都市化現象が数理的にきれいに解けるからおもしろかったのです。

それでは、テクノクラートがつくり出した都市計画の手法で日本の都市は良くなったのでしょうか。そしてアーバンデザイナーがつくった再開発のモデルが日本の都市を良くしたでしょうか。ショッピングセンターはこういうふうに展開すべきであるという計量的立地モデル、工場の地方展開を説明した立地モデル、それから、依然として社会にがっちりと腰を下ろしている街路の交通量予測モデル、発生交通量と建物床面積の計量モデル、こういうのは全部、テクノクラートの所産です。そして、都市計画を決めてゆく時に使われる道具となりました。多分、公園の配置についても、このようなパターンニズムができていると思います。

そういうことが昭和40年代から60年代、この四半世紀に日本の地域社会に展開されて、日本の都市空間がよくなったかというと、そうではありません。都市計画の専門家はこれらの現代技術を身につけたので、世の中の都市空間に関する不平不満の３分の１位は、自分達の腕で片付けられると思ったことでしょう。ところがとんでもありません。世の中の変化、特に都市空間の物的変化に与える都市計画の影響はせいぜい１割ぐらいのものではないかと思うのです。都市計画なんてせいぜい１割もないよと。あとの９割は全然別な分野の影響力です。それは金融であり、ジャーナリズムの刺激であり、政治であり、教育であると思います。こういう認識をさせられてくるのが昭和60年代以降です。それは、環境問題とか土地問題の急激な発生です。特に土地問題については都市計画は、全く貢献しなかったと言えるでしょう。

バブルのときに、地価を下げるのに何が一番効いたかというと、大蔵省指導の下で日銀が市中銀行に貸し出す資金の総量規制をしたことです。あとは、地価監視区域の発動をちらつかせながら、届け出の規模を東京都は 100平方米まで下げました。これが効いたのです。都市計画はそのときに何をやっていたかというと、僕にも半分罪があるのですが、住宅地域にオフィスを立地させないためにはどうしたらいいか、そういう地域制をつく

る必要があるや否やという議論を延々とやってました。その結果、８種類の用途地域を12種類にしました。それがまとまったときにはバブルは終わっていたのです。ですから、何の役にも立たなかった。逆に、何でこんなに事務所をきびしく排除し、住宅に特化する用途地域をつくったのか、これでは住宅と仕事場・あそび場を混在させる、いきいきとした土地利用はできない。という批判が学者から出る羽目におちいりました。ただし、このような非難は普通の人からはでません。普通の人は、自分の家を建てるときにしか都市計画との係わりはないからです。そういうことなのです。

こういうことを知らされていたのが、昭和60年代です。しかし、そんなことを言ったって都市計画は大事な行政課題であるという話題が別なところから出てきました。社会学とか行政学の先生が長いこと主張されていた街づくりのシステムが、都市計画の領域で実体化される動きがでてきたからです。一つは社会学の先生がいわれていたコミュニティーの名前が世の中で一般化してきたことです。倉沢先生がコミュニティーの考え方を昭和30年頃からずっと言われていました。学校教育と結びついてコミュニティーが都市計画の大事な部品として姿を表わしてきたのです。

もうひとつは、地方制度調査会という、審議会のような組織がとなえていた地方分権の動きです。これくらいしつこい組織はないと思います。いくらたたかれても、たたかれても、地方分権という同じ答申を嫌というほど、四半世紀続けて出してきたのです。地方制度調査会は総理大臣の直属の審議機関です。自治大臣取扱いではないのです。役に立たないけど、声だけは大きくすることができたのです。もし、自治大臣直属であったら、いいかげん５、６年でくたびれて、しりすぼみになっていたことでしょう。この調査会は大した力はないと思っていましたら、だんだん、選挙のたびごとに元気になってきました。

細川さんがしばらく総理大臣になってから以降、政治の世界が変ってきました。ご存じのとおり、今まで政治家を内心軽くみたり、冷たい目で見ていた国家の役人が、これは大変だぞと思うことがぼちぼちでてきました。ばかにしていた臨時行政調査会だって結構いろんなことをやりました。国鉄が解体されてＪＲが誕生したのも役人にはショックでした。行革委員会もしつこい委員会になりました。まだ３、４年ぐらいしか活動しておりませんが、それなりに効果が出てきたと思います。地方分権も動きだしました。いろんなことが日本新党の結成と細川総理大臣のころから変わってきました。変わってきた流れを支配している社会事象は何かというと、「個の確立が日本だってできる」という時代になってきたことです。個の確立です。これは古い言葉です。昔で言えば『人形の家』のノラです。要するに、家族を中心にしてすべての世俗的価値観が体系化されていた日本が、どういうことか細川さんのころから、独身者の１人の女だって市民よと言える社会に変質してきたのです。離婚した女だってちゃんとした１人の人間であると言えるようになってきたのです。これには、彼の現代都市的な顔つきが相当影響をしているかもしれません。あの後に、能力はあると思いますけど、田舎っぽい顔をした総理大臣も出てきました。私は、総理大臣がくるくる変わるのはいいことだと思っています。小沢一郎だって一度は総理大臣をさせていいと思います。１年ぐらいやらせて、だめになったらまた変えればいい。要するに、総理大臣は国民のきびしい評価のなかで全力で仕事をしてもらい、仕事の能力が衰えたら、すみやかに退き交代をすべきであると思うからです。ただ絶対多数の政党をバックにのんべんだらりんと居座るべきではないからです。日本の政治家の中にもいろいろなキャラクターの人達が増えてきましたが、私は是非都会がわかる総理大臣が選ばれてほしいのです。

それからもうひとつ、社会の指導階層というか、指導者・権力者に世襲型が増えてきました。この世襲社会が形成されてきたために、国家官僚がそれに押され始めてきました。要するに、明治のころの貴族社会と似た、しかし中途半端な新しい貴族社会が形成されつつあります。昔は、民百姓の息子でも能力さえあれば帝国大学に行って天下国家を支配するという官僚になれました。戦後でも、

経済成長の時代には、家柄や門閥とは関係ない、庶民の社会から抜け出た人達が政界や財界を支配しました。有名国立大学を出て公務員試験に合格すれば、貧乏人の子供でも、おれがおれがと威張り、良家の子女をけちらしてきました。そのうちにこれらの人達も金持ちになり、閨閥をつくり、支配階級になりました。この連中の子供達がその支配権力を世襲するようになりました。橋本龍太郎でも、小沢一郎でも、田中真紀子でも全部、世襲です。戦後の新興企業も世襲が多いのです。世襲で世の中を支配する人々が急速にふえています。お花の池坊だって世襲で政治に出てきています。大変な世の中になってきました。今の世襲の子供達でできあがった貴族社会がしっかりとつくられたと思います。世襲の子供達は私学の卒業生が多い。今や慶應が日本を支配しているという話さえでてきました。橋本総理がいるから、慶應義塾の先生方が審議会で目立つと皮肉をいう学者がいます。世襲による支配者はお坊ちゃんです。貧乏人から出てきた頭がよくて傲慢な国家官僚をお坊ちゃんがこのやろうとやっつけている、こんな人間模様がえがけます。こういう世の中になりました。しかし、市民はどうもお坊ちゃん型が好きなようです。要するに、大衆が知的になり豊かになって安定しますと、やさしい雰囲気を求めるというのでしょうか。女性化した社会に入ってきたともいえました。女性化した社会の中では都市計画も荒っぽい傲慢な人達、つまり官僚にはまかせられなくなります。それは市民参加という、やきもちやねたみも内包した、一見やさしそうな社会システムを必要としてきます。したがって、市民参加の都市計画といわないと、街の空間構造を変えられなくなりました。市民参加を言わないと学校の教師じゃないという時代になりました。これが都市計画の大衆化ということなのでしょうか。

都市計画のニューフロンティア

国家が女性化するとか、バーバリアン的な状況がなくなってスマートになり成熟化することは、それなりにいいことですが、それだけで事が順調に動くというものではありません。昔のようにエリート男性が強引に社会を引張り、荒っぽい外科的手法でニューフロンティアを創ってゆくことはなかなか許されなくなってきました。成熟化し女性化した社会のなかからニューフロンティアをどのようにして見つけてゆくのでしょうか。社会を前向きに変えてゆく手がかりを探すことができなければ、社会は全く衰退します。私は、思わぬところにニューフロンティアがあると思っている。それは女性と高齢者の頭と足にそのニューフロンティアを見出そうということです。それを都市計画にあてはめてみます。こうであろうという想像を入れながらの話をしてみます。

例えば、藤沢市役所に横浜国立大学の建築学科の大学院を出た、極めて優秀な男の子が就職して都市計画の仕事を担当したとします。その職員はスマートで野暮ったくなく、これ迄の市役所の職員のイメージを払拭する男です。その男は具体的にどういう仕事を藤沢市でするかというと、例えば、「都市のマスタープラン」をつくることが考えられます。市長が藤沢市の都市計画審議会に「都市のマスタープラン」づくりをお願いするわけです。その審議会にはいろんな方が入っています。市民参加だから商店街の奥様も、住宅街の奥様も、退職した大学の先生も委員になっているでしょう。通常考えられることは、「都市のマスタープラン」の原案は、数字でも、表でも、図面でも、まず市役所の都市計画課が事務局として造り、それを審議会に提出します。それをつくるのは、横浜国立大学を出たその男の子の仕事になります。彼は、数字も出すでしょうし、図案的都市計画も書くとします。私の属している慶應大学湘南藤沢キャンパスは、市街化調整区域の真ん中に開発許可でぽこっと穴をあけてできております。ですから、周りは調整区域です。彼は調整区域の将来の市街化はこういうふうになるという図面をかきます。その絵のかき方は、そこを区画整理するのであれば、通常の格子型の道路で市街地を区切るでしょう。そこでこの事務局の提出した原案をめぐっていろいろな意見が出ると思うんですが、こういうことが起こり得ます。

例えば、ちょっと知的な奥様が、「この図面だ

と通過交通がどんどん通るのではありませんか。」とか、「歩道の幅員はお幾らですか。歩道の幅員は3メーターないと木が植わりませんよ。」こういう質問をするわけですね。それから、「歩車分離の古典的な事例である、ニューヨーク郊外の住宅地ラドバーンにあなたは行ったことありますか。」というようなことも聞くかもしれません。「ミュンヘン中心市街地の歩行者天国、そういう広場を湘南台の駅前につくれませんか。」こんな意見もでるかもしれません。その奥様はきっと、今言った欧米の事例を現場にいって見ているに違いないのです。なぜならば、まず最近では御主人が海外勤務で家族ごと長期間海外の都市生活をした奥様がとても増えました。そうでない国内派の奥様方でも亭主の金をしっかりと握っておりますし、時間はたっぷりあり、そして、コミュニティーセンターでいろいろ街づくりの話し合いをしていますから、知的欲望はたっぷりふくれ上がっています。ですから彼女等は一番安い切符を探して、１０人ぐらいで元気よく、ヨーロッパ、アメリカを走り回ってきます。それを1年に何回かやっている、そういう普通の奥さんが出てきました。その奥様のなかには4年制大学を卒業している方が多いはずです。商店街のおかみさんだって、4年制大学を卒業している人がかなりいます。もしかすると彼女の何人かは、建築家学科を卒業して、酒屋のおかみさんになっているかもしれません。大学生のときに都市計画を石田先生に聞いていることがあるのかもしれません。女性はおしゃべりが大好きです。夜は男と違って悪いことをしませんから、ホテルの中でお酒をのみながら都市について住宅についておしゃべりをしていることでしょう。議論の過程で頭が整理されてきます。そういう奥様方に絶対に都市計画の専門家でも太刀打ちできないですね。まして、いくら横浜国大の大学院を優秀な成績で卒業した藤沢市役所の若い職員でも、外国にそんなにいっておりませんから、このような奥様方に知識の量ではかないません。このような話は、商店街振興という問題にもついてまわります。市の職員は商店街振興について、市や県の助成施策は説明できますが、どのような商店街をつくるかという将来像については、商店街の旦那衆の知識や経験にはかなわないことが多くなるでしょう。行政上の理屈は通っても、事例では市の職員が逆に教えられることになります。これがまさに市役所や県庁の街づくり専門職の将来の姿です。特に、都市計画とか、建築の専門職ではこのような状況がはっきりしてくるでしょう。

僕は墨田区と深いつきあいをしておりますが、その都計審の委員の人達の知識は、15年前、10年前、5年前と、年を追うごとに深くなってきています。同じ人でも全然違ってきています。都市に対する批判のシャープさと実例の上げ方が全然違ってきています。高齢化社会になり、実社会でも充分な経験をつんだ人達が退職して街づくりにボランティアとして参加するようになると、こういう傾向はますます顕著になってくるでしょう。そういう時代の都市計画の専門家は何をしたらいいかということは、今の都市計画の教科書に全く書いてありません。まさに知的社会、情報社会の出現が都市計画の専門家にこのような問題を投げかけてきているのです。

このような社会のなかで、最もすぐれた都市計画とは、数学的、造形的な面で高い評価を専門家から得ている案ではなくなるかもしれません。それよりも、充分な議論をしつくした後に結果として残った案が最善の都市計画の提案であり、市民に認知される提案であるのです。例えば、どこかの都市計画コンサルタントが、先述の藤沢市役所の若い職員に雇われて、慶應大学の通学駅である湘南台駅前市街地の再開発の絵をかいたとします。こういう絵がいいでしょうと皆さんの前に持ち出します。彼等は専門家としての自負がありますから、これが一番と思った図面を出すわけです。しかし、市民の目や考えは彼等とは違う世界にあります。道路は曲がっていてもよいし、公園は細長くてもよい、住宅地は小さい敷地でも一戸建の住宅で構成したい。こんな意見が次々と飛び出してくるでしょう。専門家がいいと言ったことが市民社会の中ですぐにいいというふうにならないのです。普通の町中の人々の目にさらされ、議論をされて、たたかれて、その結果として専門家がげん

なりするような図面になることがあります。しかし、市民参加の都市計画では、たたかれた結果のものが一番いいんです。これは極めて重要な都市計画のソフトな領域の結論です。なぜならば、正当な市民参加の手続きをとおってきたからです。手続きが完全な都市計画の最終成果は最適な答えとなるのです。そういうことが当然視される時代になってきました。この手続き重視の都市計画にはプラスの面とマイナスの面があります。マイナスの面は、審議会の委員が眠っていて、ただ市役所の役人の提案をうのみにして認めてしまうことです。プラスの面は、市役所の役人が積極的に審議会を活用し、彼等が専門家として良いと考える提案を承認してもらうことです。個性が強くて男らしい、しかし、我慢強い助役が藤沢市にいたとします。藤沢市の都市計画を最終的に決めるのは、形式としては神奈川県都市計画地方審議会です。ですが、実態としては、藤沢市の都市計画は都市計画法に基づかない任意の審議会として藤沢市都市計画審議会、そこで決まります。そこに市民を委員として任命し、集まってもらいます。そのときに、その助役さんはこの委員の間をかけまわり、「今度、この案が出ますが、よろしくお願いしますよ」と説明します。審議会ではいろいろ議論がでるでしょう。例えば、共産党の人がものすごく反対したとします。ちょっとおもしろい審議会の会長であれば、形式的に採決をしないで、「共産党の話はもっともだから、きょう、これを通すのはやめよう。もうちょっと市役所は地元の人たちの話を聞いて下さい。」というふうに持っていきます。そのとき、この助役さんはこれを前向きにうけとめ、自分が良いと確信している案を認めてもらうために、地元へ出かけて大衆討論会を開きます。審議会の委員にも出席してもらいます。いろいろ批判はあるとしても、それを数回いたします。そうなると地元の人達の3分の2ぐらいの住民は受け入れてくれそうだという雰囲気ができあがってきます。こうして再び都市計画審議会に彼の案をもちこみます。共産党が反対をしても、助役はそれだけの努力をして、その結果地元にも理解する人達がふえた。彼の案を認めて良いではないかとみんなは思います。そして承認されます。

要するに、都市計画審議会は形式を踏むだけの場かというと、必ずしもそうではないということを言いたいのです。こうして市で十分議論をしたあとに、市の都計審を通過した案は県庁へ持ってゆかれます。都市計画法に基づき神奈川県都市計画地方審議会にかけます。そこで市の結論が理屈としてはひっくり返る可能性があります。しかし実体では絶対にひっくり返りません。市の結論がそこで否定される確率は、航空機事故よりも低いでしょう。そして、そこで承認され、その結果が告示されます。だれもが見ない県庁のガラスケースの中に出され、何週間かすると正式決定となります。これは、民主主義の手続きとしては完璧な手続きです。しかし、専門家からみるととんでもない悪い都市計画が通るかもしれないのです。

しかし、それほどあくの強い助役さん、男っぽい助役さんはいなくなりました。助役さんはおしなべてやさしくなりましたから、そういうことを考えないで、都計審や都市マスタープラン委員会の大衆討議にかけて皆さんの意見を吸収し、都市計画の案をまとめるようになりました。役人の個性の強い発言が聞かれなくなりました。役人が黙る時代になりました。大衆が横暴になった時代とも言えます。頭のいい人、市民代表が筋のとおった正論を言いますと、お役所の人は議論ができなくて負けてしまうことが多くなりました。

ところが、そういう市民は批判はしますが、このようにしたらよいといった解答は出さないのです。市民が批判をしますと、お役所の善良な役人は、批判された点だけを直します。このように直すと全体の体系は絶対によくならないのです。これは都市デザインのような具体的な都市空間の設計変更の場合によくおこります。みんなが言ったことを全部入れて直せば、いい芸術作品はできません。いい文学作品、いい音楽はできません。そして、筋の通った法律もできないでしょう。要するに、批判に応える部分的改善の集積は、凡庸の集積であるわけです。しかし、それは都市計画で大変重要なのです。なぜならば、都市計画は凡庸でいいのです。すべての構成要素が刺激的で、あ

るいは快適で美しい広場をつくる必要はないし、公会堂をつくる必要はない。すばらしい並木道をつくる必要はないのです。それらは、専門的視点の学者や芸術家的なアーバンデザイナーから見ると、とんでもない馬鹿なことを市役所がしていることになります。こんなアーバンデザインを承認するなんて、あの市は狂っている、なんていうことを彼等から言われるかもしれません。しかし、それは手続きとしては正しいのです。この話題が、僕はこれから極めて重要な話になってくると思うのです。

実際にこういう話は、今、都市計画の行政システムを根本から変えようとする地方分権推進委員会の人たちのなかでおきています。なぜならば、今までは何となく、市町村の役人よりも県庁の役人のほうが偉い。県庁の役人よりも国の役人のほうが偉いと皆が思っていました。なぜならば、上へ行けば行くほど都市計画という専門領域に特化したテクノクラートがいます。彼等は地域の利害に関係なく客観的に判断できます。したがって、その人達の意見に従って案をつくってゆけば間違いはおきない。そういう理屈が通っていました。しかし今はそうではありません。重要なことは、都市計画は誰のためにあるかという根本をいつも考えておくということです。率直に言うと、向こう3軒両隣の近所つき合いを仲よくするための技術的手法が都市計画であると思っております。それだけのものなんです。何も都市計画を通じて天下国家を議論する必要はないのです。それだけでいいのではありませんか。それなら市町村の人に都市計画をまかせましょう。市町村の人もあまり技術をひけらかさなくてよいのです。皆さんの要求を聞いて、どこかのコンサルタントに図面をかかせます。そのコンサルタントは平凡な技術者でよいのです。彼等が答えた解を市民が満足すれば、市役所は司会者としての機能をはたし、そのようなコンサルタントを住民に紹介し仕事を依頼すればよいのです。それでまとめれば大成功で、それを県庁の役人がとやかく言う必要はないのです。こういうのが地方分権の議論のなかに存在します。

今までの話は、例の機関委任事務論に関わりがあるわけです。市町村が困ったら県庁へ行って、県庁で答えられなかったら国へ行く、こういうヒエラルキー構造はおかしいという地方自治体の主張があります。もちろん、知事さんは公選ですから、県庁は半分は独立機関になっていますけれど、他方で機関委任事務をやっています。その下に不思議なことに市町村が隷属しているわけです。市町村の首長さんは私たちが選びます。そしてすぐにいろいろな注文や苦情を言いにゆくのが市役所や町役場です。武蔵野市の土屋市長のほうが青島知事よりもずっと身近です。三鷹市の安田市長のほうが青島知事よりずっと生き生きしています。三鷹の安田市長と武蔵野の土屋市長は、いい意味で戦っています。三鷹市役所の連中は、三鷹駅前商店街を振興させるために、吉祥寺商店街をつぶせなんて気勢をあげています。調布は調布で頑張っているでしょう。一番私が頭に来ているのは府中市です。あそこは競馬場があるために何もしなくても大金がころがりこんでくるんです。ちょっと言葉は過ぎるかもしれないけど、東京でも、都庁の没個性的な姿勢にくらべれば、市町村は本当に個性的になってきました。都庁ぬきで国と一緒に仕事をしたほうが、話が早いと思わせる実力もついてきました。

要するに、国と県と市は工学部的に言えば、二次元の図面で表示されるトリー型のヒエラルキー構造ではなく、市民を原点においた、立体的構造であると考えるべきなのです。つまり、ＸＹ、ＹＺ、ＺＸの三つの平面をそれぞれ市、県、国が担うと考えるのです。今言ったように、三次元的に私たちの生活や仕事の内容を整理すれば、ＸＹのところは市役所が分担し、ＹＺのところは国が責任をもち、ＺＸのところは県庁が引受けるといった具合に、お互いにほどほどの調整をすればいいわけです。調整をしなくたって、けんかをしていてもよいわけですが。ＸＹ平面が日常生活の平面とすれば、市民にとってそこが一番重要です。ＹＺ平面は、土木・建築の領域でいえば、第2東名自動車道とか第3の首都圏空港とか、利根川の治水といった話です。日常生活と場合によっては対立する行政内容が入ってきます。あと、ＺＸ平面

には何がくるでしょうか。広域のゴミ処理場の建設、港の運営、幹線地方道の建設等です。こう考えてくると県庁の仕事は受身で調整的な仕事が多いと思います。そういうふうに私達は役所を認識すればいいと思うのです。成熟した市民社会では権威は最小であってよいのです。

こういうふうに立体的に考えれば、都市計画はわりあい整理がつくわけです。要するに、都市計画は基本的にはＸＹ平面の話です。ですから、何でもかんでも都市計画と言ってくれるなということです。外郭自動車道路や首都圏中央連絡道の話は都市計画ではありません。ＹＺ平面、つまり国家プロジェクトです。国が責任を持つべきなのです。高尾山付近で問題になっているこの圏央道は、都市計画決定をしなければいけないのでしょうか。考えてみれば、あの都市計画決定を何で都庁の役人がしなければいけないのでしょうか。ほんとうにあれが国家にとって必要であるならば、国の国土計画として独立して定めるべきです。国の役人が現場説明をして、図面を出して、地元と折衝すべきです。八王子の議員さんのところに国の連中が行って根回しをするべきことを、何で都庁が国の代弁をする必要があるのでしょうか。あれは都市計画ではなく国土計画です。そういう整理をやらなければいけないのです。つまり市民側も、都市計画、都市計画、何でも都市計画と言うなということです。そんなに都市計画は強大な力を持ち、あこがれる内容を持っているものではありません。それは刺身のつまみたいなものかもしれないのです。そういう点も是非わきまえて頂きたいのです。

都市計画家の新しい役割

しかし、都市計画は日常生活に必要な公共施設の配置にかんする仕事であるならば、市民社会の御用聞きとしての使命も持っているべきです。御用聞きとしての使命が大事であれば、これ迄の都市計画の内容を変えていかなければいけません。いつ迄も公園、道路、下水道、区画整理それだけに仕事を限定するべきではありません。都市計画で、老人ホームを決定することをやる必要があるかもしれません。なぜならば、老人ホームが街の中に来ると、品のいい奥様方がいやがります。特別養護老人ホームをこういうところにつくるのは困りますと言います。どこの住宅地でもいやがれば、一体どこへ持っていったらいいのでしょうか。持っていくところがなくなります。それであれば、市の都市計画審議会で決定的に審議して、ある場所を特定して都市計画決定をすれば良いのです。そういうことはいくらでもあります、ごみ焼き場の話もありますし、お墓の話もあります。

このように、幾つかこういうふうに都市計画でやるべき新しいフロンティアを探していったときに、これから一番重要な領域は高齢化社会の中での社会福祉です。これは是非都市計画の一領域として扱う必要があります。

ところで、僕は皮肉を言うのが好きなものですから、こういうことをときどき考えます。中央政府は国家を意味します。しかし往々にして、国家は市民社会にサービスする本質は何かを充分に考えないで、ある行政上の行為をすることがあります。

例えば国有財産を処分するといった話です。国有財産は国民の税金で買ったものですから、売るときには高い値段で処分したいと中央政府は考えます。大蔵省の理財局は当然そう考えます。しかし高い値段で処分する国有財産の土地は、無人の原野にあるのではなく、日々生活している地域社会の真ん中にあるのです。その土地を大蔵省が自分の都合だけで、「ここは商店街のすぐ後ろだから商業地域にして、目いっぱい容積率を 500%に指定する。そうなればその地価は坪当り 1,000万円になる。」というように、一方的に国家として国有財産の値付けをきめ、それを県や市に申し伝えるということはどうもおかしいと思うのです。もしかするとそこは公園にしたほうが、市民ひいては国民が国有財産を長く生かして使うという点ではいいかもしれません。

ついでに申し上げますと、僕は東京フォーラムというのは20世紀の東京都の大失策だと思います。あれを決めた建築家集団もひどいものです。そして東京フォーラムの存在をまともに批判できない建築家がいるとすれば、それは建築家として失格

です。私の意見では、あそこは公園にすべきであったのです。そして、その地下に、ほどほどの公会堂をつくればよかったのです。それをあんな大事なところに、とんでもない代物をつくったと感じています。東京都でも間違うんです。ですから国家はもっと間違うかもしれません。例えば、港区の六本木に、防衛庁があります。防衛庁は四谷に行きますから、あそこがあきますね。これを高い値段で大蔵省は売ろうとします。なぜならば、この国有財産処分のお金で、つまり税金を使わないで防衛庁の移転先の建物を造れるからです。そこで 700%の商業地域に用途や容積率を変えることを大蔵省は考えたとします。それで、港区役所に、あそこを 700%の商業地域に変更したいのだけれどどうかと要求します。区役所はこの件を港区の都市計画審議会に出します。もしここに変な男達が何人かいまして、とんでもない、港区の都市計画審議会としては、あそこはそんな高容積率は認めない。あそこの利用方法で一番いいのは緑の森にすればいいんだと主張したとします。彼等は「森にすれば皆さん満足ですし、そして港区は金があるのだから、東京23区の区民のためにも、夜間のセキュリティーがしっかりして絶対悪いことのできない森をつくれ。」と言い張るとします。そういう意見に他の委員も賛成すれば、森になるための用途地域は、赤色の商業地域ではなくて、第一種低層住居専用地域ぐらいになります。建ぺい率もうんと下がります。このような港区の都計審の決定について、東京都庁の役人はけしからん、国に逆らう気かと、中間管理職のようなことを言うかもしれません。しかし、東京都都市計画地方審議会にまた変な男達がいたとします。その案が港区から上がってきたとき、彼等が、よしそれでいこうということで、とうとうと演説をして、審議会の委員をオルグってしまい、それが東京都都市計画地方審議会が受け入れたとします。それを国家がくつがえすことができるのでしょうか。先にも述べましたように、都市計画は、大部分が市民生活に結びついた極めて近隣的な土地利用規制です。向こう三軒両隣の話です。そういう領域を対象にした都市計画に、国が防衛庁の土地を高値で売るという、国家権力の介入がおきることになります。しかし、土地収用委員会と同様に、即地的な都市計画の最終決定は、都道府県の都市計画地方審議会によって行われるのです。したがって、国といえどもその決定をくつがえすことは極めて困難です。したがって、都の都計審が防衛庁跡地を一種低層住居専用地域として決めますと、それが最終結論になります。ざまあみろということになるわけです。ただ、これはざまあみろということだけではすみません。それは国民の財産としての防衛庁の土地ですから、片方で国民の税金の使い道と結びついてきます。それをそういうふうに地方自治体の決定によって土地の売り方を決められるのが正しいのかどうか、これは裁判になるかもしれません。広く国民の土地資産として高い価値があるのがこの防衛庁の土地でしょう。それを国家の税金の使い方を節約するために高く売ろうとする。それを地域社会の港区と東京都が、そんなことをすると東京都心をより魅力的にするという国家目的に反するから、東京都はそこを公園にしたという、そういう話が出てきます。この両者の価値論争・土地の効用論争は一度裁判ではっきりとさせてみたいと思います。

僕はこれからの都市計画というのは、いろいろな土地の事情によって国の権利、地方の権利、私人の権利をぶつかり合わせて裁判を行なうことが起きると思います。国家と東京都の他にも、農水省の農地転用をめぐっての建設省と農水省といった国と国のポリシーのぶつかり合いもあります。埼玉県庁が都市計画法に基づいて、2ヘクタールから5ヘクタールまでの農地転用を農地法の権限如何にかかわらず、埼玉県としては認めてゆくことにしたようです。しかし、農水省は2ヘクタールから5ヘクタールまでは関東農政局が処分する国の直轄の仕事であるというので拒否したという事件がありました。これは裁判になっておりますが、埼玉県が意図的に起こしたんだそうです。埼玉県は負けるのを覚悟で裁判にもちこんだようです。要するに地方自治体が土地利用をコントロールするんだということを、負けるのを覚悟で、象徴的に裁判で主張したいわけです。こういうふう

なことが起きてくるのが、21世紀的な都市計画でしょう。

そのときに、ではだれがそれを裁くか、だれが評価をし、黒白を決めるかが鍵となります。そこで初めて都市計画の専門が改めて問われてきます。都市計画の専門は、発生交通量が幾らで、それを道路に配分すると道路容量の何割になるかといったテクノクラート的な問題だけでありません。地方行政からの主張、住民としての主張、国としての主張、これら相反する主張のどれが現在の社会で、まさに都市計画として即地的に、正しいのかを判断する人達が必要になってくるのです。まさにこれは専門家としての判断です。それは裁判官のできることではないのです。21世紀になると、こういうことを解く使命をもった新しい都市計画家が誕生してくると思います。彼等は役人でもなく、学校の教師でもなく、その評価を専門とすることになりますから、人格的にも尊敬され、見識が広く、実務にも詳しくなければなりません。そういう人達であってこそ、客観的なジャッジができるわけです。この人達を特別の裁判組織の専門家として、例えば4年とか8年つとめてもらうことが考えられます。そこでとりあげられる訴えの事例は多様になるでしょう。市と市の間の争いかもしれない。市と県の争いかもしれない。いろいろなケースが出てきます。

したがって、市民社会はそういうことを次々と引き起こしますから、極めて忙しくなります。個人や個々の組織の主張を大事にすることは、今言ったこととつながります。核家族といった予定調和型の家族や、家父長制を大事にすることが日本社会の美徳でしたが、高齢社会と市民社会の波が私達を洗い始めますと、その基本の道徳律がゆらいできます。美徳もいいのですが、美徳だけで僕のような年寄りは、息子に面倒を見てもらうことを要求できなくなります。そのような大規模な家族がないわけです。息子に財産を残すよりも、自分達で使ってしまうことを考える親達がでてくる時代ですから、土地や家財に根をもつ都市計画でも裁判が起きてもおかしくありません。

残り少ない時間になりましたが、都市計画の分野で私が日頃理屈がおかしいと思っていることをかいつまんでお話しをします。私からみると絶対におかしいということを申し上げます。

まず、何で、建設省は、国有財産の土地の上に国有財産の建物をつくって、そこに入っていなければならないのでしょうか。今、自治省はＪＴビルに入っています。人事院ビルを壊してつくりかえるからです。私は自治省はこのまま民間の貸しビルに居つづけていても良いと思います。どうして中央政府は、あるいは県庁は、市役所は、自分の土地の上に自分の建物を建てて、それも人を寄せつけない尊大でつまらないデザインの建物を建てて、そこに役人が入って威張っていなければいけないのでしょうか。

これは大変素朴な話です。特に情報公開の世の中であれば、秘密にする事項が多い役所は外務省と防衛庁と警察のほんの一部ぐらいです。外交交渉とか犯罪問題とか、国際的な提携関係で秘密であることを必要とする役所はもちろん幾つかあります。しかし、大部分の省庁、たとえば自治省とか、建設省とか、郵政省は、情報公開をしなければいけないわけですから、役人の手元の書類を、ある日テレビが撮ったとしても、理屈としては一向おかしくない。役人はシビルサーバントですから。私の感覚では、その点で県庁は一番組織防衛のカラが堅く、権威主義的な雰囲気をもっています。県庁は本当に困る組織です。

公の土地に公が建物を建て、そこに居座るという、その前提が崩れますと、首都移転は山の中でなくていいのです。大きいお金をかけなくてもいいということになります。なぜなら貸しビルに入ればいいからです。建設省でも郵政省でも、貸しビルのサービスのいい不動産会社と5年ごとに賃貸契約を結びます。三菱地所がサービスがいいと思って5年入ったけれど、あまりにも役所的でよくなかったから、次は三井ビルに移ろうと考えていいのです。三井も不安定だ、それならば森ビルへでも行くかと考えて良いのです。5年置きぐらいに貸しビルを動けばいいのです。それは情報公開の世の中ですから、役所には本来市民にかくすべき機密書類はないし、盗聴装置があったってい

いのです。学校の先生の内申書まで見せろという時代ですから。そうなれば、適当にとりあえず20年ぐらいこの町に首都をつくればいいという話になります。何も首都であるといって豪華に権威主義的に飾りたてる街をつくる必要はおよそありません。伊勢の大神宮と霞が関とが同じだという顔をする必要は毛頭ありません。ですから、東京都庁があんな冷たく人を寄せつけない建物にいる必要は全くないのです。

大学もそうです。広大なキャンパスに壮麗な建物を建てて、こんなに歩かせる必要はないのです。(笑) むしろ、駅の上にちょっとしたホールと教室用の床があるオフィスビルを京王電車がつくり、それを都立大学が借りればいいのです。このような民間資本型公共施設の建設を種にして、一寸面白い新首都論を最近まとめてみました。

名古屋駅の西側に、昔の遊廓地域があります。今は安普請のオフィスビルが立並び、予備校も集まっています。この地域を再開発して、あそこに大規模で質の良い貸しビルを十個ぐらい、民間の企業がつくれば、そこにすぐ首都移転ができます。なぜなら、名古屋駅は東京と大阪の真ん中にあり、とても便利の良いところです。地震については少し気がかりですが、全国からみて首都移転の場所として一番便利のいいところです。しかもここは駅裏ですから土地が安いのです。飛行場も手近にありますし、中部国際新空港もいずれできるでしょう。

問題は、役人も人の子であるということです。奥さんも子どももいるんです。奥さんから見れば、山の中の官舎に行くより、大都会にある官舎に住みたいにきまっています。名古屋ならば名古屋大学もあるし、南山大学もあるし、名城大学もある。自分の息子のレベルに応じていろいろな大学を選べます。おまけに区画整理した郊外の住宅地に一戸建て住宅を安く建てられます。松阪屋もあるし、三越もあります。地下鉄もしゃれています。名古屋が新首都になれば、東京から居を移して亭主と一緒に暮らしてもいいと奥さんも子供も考えるでしょう。そういうような都市計画をどうして国は考えないのでしょうか。

ついでに言いますと、私は国会議事堂も軽量鉄骨二階建てで、権威主義的な装いを絶対に避けるようにします。地下一階に簡易ベッドをしつらえて、議員さんはいつでも国会に泊まれるようにします。国会議事堂の周りに堀をめぐらせ、水を入れて、大門にはね橋をつくります。大体わかるでしょう。一件落着まで議員さんを外に出さないようにするためです。一件落着するとはね橋が降りて出ていっていいということになります。

それから、議場の周りはギャラリーで全部囲います。そこは電気をこうこうとつけまして、ガラス張りにします。このガラスはヤクザの乗っているベンツのガラスを逆にしたものです。わかるでしょう。ヤクザのベンツは、中から外が見えるけど外から中が見えない。これを逆にすれば、外から中が見えるけれども、中から外が見えないことになります。こういうガラス張りにしまして、その堀の向こうの土手に読唇術のすぐれた専門家を座らせて、双眼鏡で見させるのです。そうすれば、全部代議士が何をしゃべっているかわかるわけです。それだっていいんです。代議士さんは我々が選んだサーバントですから。そして、地下一階には水と簡易ベッドと、非常食用の乾パンを置いておけばいいのです。みんなつらくなるから一生懸命議論して、早く大門の橋を降ろそうとします。そういうのが国会議事堂です。

首都移転の話も山の中に荘厳な都市をつくるという、キャンベラを範としたような議論で進められていますが、すこし民間の力を信用するとか、家族の大切さを思い直すことにすれば、これ迄とは全く異なる都市像が描けることになります。このような思いをめぐらすことは、知的ゲームとして大変楽しいことです。多分都市計画のニューフロンティアを探すというときには、二つの手がかりがあるように思うのです。ひとつは、わりあい堅苦しい市民参加、そしてその手続き論という領域です。二つめは、ここにすこし述べたような、漫画チックですけれども、相当変わった状況を常に頭に描きながら、予想外の都市像を考え出すということです。これはいい意味で知的クリエーターの仕事です。初め、私はアドボケーターと言いま

した。これは前者の領域で必要な専門家です。片方で後者の領域ではそのような知的クリエーターが必要です。そういう人たちが、果たして今の都市計画の大学教育から出てくるかというと、残念ですがでてきそうもありません。ついでに言いますと、ＪＴビルはしばらく中央政府が使うはずです。なぜならば、自治省が人事院ビルができて移りますと、次は建設省の建物を壊します。そうすると、建設省が人事院ビルに入ります。しかし運輸省は行くところがないですからＪＴビルに入ります。次に運輸省と建設省の建物を建て直すと、運輸省はそこに戻りますが、今度は農水省を壊すかもしれない。農水省がまたＪＴビルに来る。ですから、ＪＴビルにはまだ中央官庁は10年ぐらい仮住まいするわけです。こうして霞が関の中央官庁の建物は、首都移転にかかわらず建て直されていくのです。これも不思議なことです。さらに、首相官邸を建て直す話もすすんでいます。こういう状況をみていると、首都移転について、一体国家としての統一的な意思があるのか疑わしくなってきます。国家としての主体が不明確なこのような中央政府ですから、行財政改革や地方分権の声のもとに、根本からその体質を変えてゆく時代が到来したのは当然だと思います。したがって、21世紀の都市計画も、これ迄の流れとは全く異なる体系、思潮が組立てられてゆく運命にあると考えるのです。

ちょっとラジカルなしめくくりになりましたが、これぐらいで終わらせていただきます。(拍手)

3．都市科学への期待

倉沢　進

倉沢です。高橋先生のおやりになっている高齢社会プロジェクトの対象になっちゃったかなと痛感したのでありますが、都立大学の教員としてここへ何年か通いましたけれども、きょう、生まれて初めて、電車の中できょうはどういう話をしようかと思っているうちに目を開けてみたら府中のあたりを電車が走っておりました。おかげで伊藤先生のお話を最初から伺うことができなかったというような次第であります。

本来私が前座をして、伊藤先生のお話を伺うのだったと思いますが、伊藤先生のご都合で、私が後になりました。滋と進というのはわりといい漫才コンビであるという人がいるようでありまして、この謹厳な福岡先生がプログラムを組んだのに、どうしてこういう組み合わせにしたんだろうかと思っているんですけれども。

高山英華先生という都市工の大先生が、右腕は伊藤、左腕が前所長の石田先生。右と左とちゃんと役割が分かれているところが計画的だと感心したのですけれども。石田先生はどうしようもないクソ真面目な人で、伊藤先生はごらんのごとく洒脱な先生である。高橋先生と私は、同じ都市社会学を勉強していて、高橋先生は温厚な紳士として知られておりますが、私はこの辺、どうしようもないずっこけであります。ずっこけの話を続けてお聞きになるのもお疲れになると思いますが、ひとつここはお許しいただきます。

日本都市学会と都市研究

来る前に考えていたことはこういうことです。私が大学の学生になったころ、昭和20年の一番おしまい、30年にかけてのころですが、さっきチラッと小耳にはさんだ、伊藤さんは、都市工ができたのは30年とおっしゃったのでしょうか。

27年。それよりはちょっと前のことでありますが、日本都市学会というのが、現在もあることはあるのですが、戦前にもあったことはあったみたいですが、それが復活をしてそして学会結成ということになりました。私は多分学部の学生のときに復活第１回があって、私が大学院に入ったときが復活第２回で、そこに出て私は生まれて初めての報告をしたような記憶があるわけであります。奥井復太郎先生、この先生は昭和15年ごろに『現代大都市論』という大著をお書きになった、日本の都市研究の先達の一人であります。この先生を中心として、磯村英一先生、小倉庫次先生、このお二人は、都立大学建学当時のスタッフでいらした先生です。少しお若いのが東大の地理の木内信蔵先生ですか。そしてやがて都市工をおつくりになる丹下先生、高山先生といったような先生方が

集まられて、学会ができた。私は何もわからないのに参加させていただきまして、多分会場に集まったのはこのぐらいの人数だったんじゃないかと思います。

まだ覚えておりますのが、大阪で何回目かの大会があって、みんな同じ日本風の旅館に泊まりまして、みんなで一緒にお風呂に入りまして、それで、奥井先生、磯村先生の背中を米林先生という方が流されました。私は湯気の中でもうもうしてボケッとしておりましたらば、私までつかまって、米林先生に背中を流されたという、後になっておれは何をしていたんだろうと思ったような、そういう非常に人間的な学会でした。そしてある事情から私がここ数十年その学会は失礼しておったんですが、先ごろ、この学会の関東支部というのですから、日本都市学会というのは関東都市学会とか、中国都市学会とかの連合体の組織であります、そこの関東都市学会の総会でホームレスの話をしろというお呼び出しがかかりまして、お邪魔をいたしました。何十年ぶりかでまいりまして、何かタイムスリップして前世へ戻ったのかという感じがいたしました。

そのころ、新進、中堅の学者でいらした先生に清水馨八郎先生、服部銈二郎先生、正井泰夫先生、地理学者としては皆さん高名な方たちですが、そういう先生方がおられました。私なんかよりも一段と高齢でいらっしゃったのですが、ソフト帽でもかぶってステックでもついて、老人クラブをやっていらっしゃるかなという感じの学会になってしまって、ある感慨をもったわけです。これはもう10人ぐらいしかお集まりではありませんでした。

都市学会がそういう形で40年間、当初の意気込みに比べると非常に現在、残念な状況になっている。都市研究所になり、そして博士課程ができて、これから船出をしてどんどん発展していこうという皆さんにこういう話を申し上げるのは場違いかもしれないけれども、逆に言えば、前車の轍を踏んでいただきたくないと思いますので、あえてこの話を申し上げるわけです。

この都市学会が颯爽と始まったときに、最大の課題は都市学という学問が成り立つかという問題でありました。都市学会を名乗るのだから、それではその対象である都市学というものがどんなものか。果たしてそんなものがあるのか。どういうものとして構築されていくべきなのか、そういった議論がそこで行われていました。そのときの議論の内容は、「都市学成立の理論と課題」というような題目の年報が出ておりますので、図書館でごらんいただければよろしいかと思います。

そこで、非常に一生懸命議論をいたしました。私にとっては大変いろいろなことを勉強させていただいたと思います。お風呂の中であったのか、汽車の中だったのか覚えておりませんが、奥井先生から教わったことは今でもよく覚えております。

都市というものは東に広がらないで西に発展するものであるという法則があるという説があって、いろいろなあやしげな説明がたくさんありました。奥井先生が東京について私に教えてくださったのは、こういうことでありました。江戸の町の東側は、水田地帯だった。西側は雑木林であり、開墾すれば畑作地帯である。奥井先生のような古い方は山手線の赤羽から新宿、渋谷に至るあたりは、東京の使う便所から出たものを運ぶためにあったといったような時代をごらんになっていらっしゃるからそういうことをおっしゃるわけですが。そして当時は、水田の値段、地価は当然のことながら非常に高くて、雑木林で畑作にしか適さないような土地は非常に安かった。したがって、当時誕生したサラリーマンは、家を建てようとすると、西側の安い土地を買って家を建てたのである、こういうご説明でした。

これが本当に正しいかどうかの検証は、興味のある方にやっていただくべきことであろうかと思うんですが、奥井先生は、日本の都市社会学の学会の中では、都市社会学の建設をしたビッグ3のお一人であって、社会学者と一応勘定しています。しかしご出身は経済学であります。慶應大学というのは、伊藤先生も慶應大学だからああいう話をしていらっしゃるのではないかとチラッと思わないでもない、東京大学のころはもう少し謹慎でした。慶應大学というのは、非常にいい学風を持った大学で、都立大学とは非常に違っていた。ある

とき慶應大学の社会学の先生と私が話をして、この慶應の先生には都立大学がわからないんですね。おまえがいるから都立大学では都市社会学をやっておるんだ、こういうわけです。そうではなくて、都立大学には社会学科に都市社会学講座というのが建学のときからちゃんとあったんだ、その講座があるから私が呼び出されてその教育をしているのである。説明してもどうしてもわからない。慶應は卒業生の中のちゃんと優秀な人を外国へ留学させて、そして好きなことを勉強しろ、そして好きなことを研究しろ、こういうことを要求する。我が国ではちょっと例を見ない大学で、少なくとも当時はそうだった。

そして奥井先生は、ドイツへ行って勉強されて帰国されて、慶應大学経済学部で都市社会学という講義をやっておられた。社会学は慶應義塾では政治学科にもありますが、経済学部には当然本来はなくて、文学部にあるわけです。経済学に都市社会学という名物講義があった。そして、私もあるとき、慶應の経済学部の中鉢先生から呼び出されて、この都市社会学という講義は奥井先生がやってこられた慶應経済学部の看板講義であった。その後奥井先生のお弟子である小古間先生という方がやってこられたけれども、年をとられて、つぶすわけにいかないからおまえに頼みたいとおっしゃって、数年やらせていただきました。

その後、慶應も少し世間並みになったなと思うのは、文学部の社会学のほうで社会学という名前の講義は自分たちでやりたいという声が出てきたから、おまえはもう来年から来なくてよろしいと言っていただいたわけですけれども、少なくとも慶應義塾は、ある時期まではそういう非常に自由な学風を持った大学であったし、その中で奥井先生のような学者が生まれてきた。

今、私が申し上げた、東京がなぜ西に広がっていくのかという説明は、経済学的な説明、社会学的な説明、あるいは地理学的な説明になるかと思います。これはコーヒーでも飲みながら、院生諸君であれば議論していただきたい。私は実はきょうこの席で英語のついた冊子を拝見しておりまして、キーワードは学際的であると書いてあったのに愕然といたしまして、学際的ということは危険であるということをあえて申し上げたいのでこんなことを申し上げます。

ついでに言えば、グラデュエート・スクール・フォア・アーバン・サイエンス、都市科学研究科というのを考えたときには、アーバン・サイエンシスというぐらいの意味で考えたような気が私はしているのですが、断固アーバンサイエンスという単数の名前を立派におつくりになったということは、お覚悟のほどが知れるというふうに思うわけですが、そういうことについては後でお話しますが。学際的というのは怖いと私は率直に言いたい。もちろん奥井先生のようなお立場を学際的な学者でいらしたという言い方をすることは、日本の普通の習慣ではありますから、それまでおかしいというわけではありません。

奥井先生の論文で、活字を私は拝見しましたけれども、多分、慶應義塾の塾長として、卒業生の中の最有名人の一人であります永井荷風について講演をなさる必要があって、何か話をした。それが活字になったのを私は見たと思うのですが、「永井荷風の東京」というような題目のペーパーであったと思います。こういうことが書いてありました。

ご案内のように、永井荷風の小説には、本人がモデルかだれがモデルか知りませんが、昔の言葉で言うと有閑紳士とか、高等遊民とか呼ばれるような何で食ってるのかわけがわからんような奇怪な人物が主人公としてよく登場いたします。その主人公の、ある日の行動を追ってみると、朝は新宿十二社の芸者屋の女将とプライベートな部屋でこたつに足を突っ込んでしゃべる。十二社というのは、もうちょっと先まで行くと鍋屋横町という伊藤滋先生が小学生時代を過ごされた町があります。

それから午後になると、今度は白山、私が住んでいる所ですが、白山という新開地の芸者で、山だしの芸者というのもなかなかおもしろいというような感想を持ったり、主人公はするわけであります。そして夕方になると、本格的な向島へ行ったほうがいいから向島へ行く。というコースが小

説に出てくる。これは何に乗っていったかというと、市電に乗っていったんです。市電の時速というのは私は正確には知りませんが、少なくとも都電廃止という前後の時期の都電で十二社へ行って、それから白山へ行って、それから向島へ行くという行動を1日のうちに完結させるのは非常に困難であったのではないか。当時は市電というものはそのようなスピードできちんと走っておって、このような高等遊民が、そういう優雅なといいますか、グータラなといいますか、そういう生活を過ごすということが可能であったということがわかるわけです。

専門化の時代の専門科学の論理に従うと、こんな話は文学的な問題であるということになるかもしれない。少なくとも役所論的に言えばそうなる。永井荷風の小説から科学が出てくるとはだれも思わない。しかし、当時の東京がそういう都市であったということ、そしてそういうタイプの人間がそうやって生活をしていたということ、そしてそれを支えるインフラとして市電と当時呼ばれた路面電車が、それだけのスピードで走っていた。こういったことに注目して、取り上げられたのは、私は奥井先生の炯眼であったと思うわけです。伊藤滋先生もさすがに伊藤整のご子息だけあって、着眼点は極めてユニークでありますけれども、奥井先生の着眼点もこれまた大変ユニークであったと思うのです。

これは、しいて学問は何だろうか、交通工学の話だと分類するのであろうか。それとも社会学の話であるだろうか。時間空間行動の問題として社会学の問題だと考えることもできるし、交通工学の問題として考えることもできるでありましょう。しかし、多分奥井先生のご趣旨は、自分は東京というものを考えて、その素材としてたまたま永井荷風の小説を読んでいればそういうことを考える。おれは経済学者であるか社会学者であるか、それとも交通工学者であるかといったようなことは眼中になかったと思いますし、それが奥井先生の都市研究を今日まで残している理由ではないかと。ちなみに大空社という出版社から奥井先生の著作集が今度刊行されているわけですが。

そういうことを考えますと、少なくとも昭和20年代の最末期にスタートしたときの都市学会というのは、そのような学際的などという言葉を使っていなかったけれども、本当の、こういう言葉で言えば、アーバンサイエンスを打ち建てようという意図、そしてそのような実質的なお仕事を持っておられたということを改めて私は思うし、皆さんにも申し上げたいわけであります。

それがどうしてその後、だめになったのか。老人クラブになってしまったのはなぜか。これは率直に言って私は学際的ということを言い過ぎたせいじゃないかと考えているわけです。

私はまだ強烈に覚えているのですが、九州で都市学会が開かれたときに、地理学の先生が都市の機能という言葉を使っていろいろご報告をされたわけであります。そうすると、一人の社会学者が立ち上がりまして、おまえの言う機能とは一体どういう意味であるかと、少なくとも機能という言葉は構造と機能というふうに組合わされた概念であって、おまえは何を構造と考え、何を機能と考えて今のようなわからんことを言うかというような議論を始めたわけであります。当時社会学では構造機能分析というようなことが非常にはやっていた時期でありましたし、社会学者として機能という言葉の地理学者の使い方に非常に不満があったことは、私も多少は似たようなことがないわけではない。しかし、地理学の皆さんは、都市には政治機能と文化機能と経済機能がある。経済機能の中には商業機能と工業機能がある。こんなことは、学問以前の常識としてそういう使い方をするものだと思って、使っていたわけです。それをつかまえて、おまえの機能はおかしいと、少なくとも社会学の世界の中での機能という用語しか知らない人間がそれに文句をつける、そして地理の先生はおたおたして、それに対して答えることができない。こういうことが繰り返されてきたわけであります。そして若い連中が何を言うようになったかというと、都市学会へ行くと、何を言ってもばかにされるし、何を言っても通る。しかし、例えば、都市社会学をやっている人間であれば、社会学会へ行ってうっかりしたことを言うと恥を

かくし、けしからんと言われる。だからそっちへ行くときは一生懸命徹夜で準備をして報告をする。都市学会へ行くときは世間話をすれば、それで通ったりもする。こういうようなことになりまして、都市工学が多分真先に逃げた、その次に社会学の部隊が逃げ出した。結局残ったのが、多分、先ほどの老人クラブの先生方が大部分地理学の先生でいらしたというのは、そういうことかと思うのですが、地理学は万学の母で、あまりうるさい専門科学的な杓子定規なことは言わないのが地理学だと思っている、私は長所であると思うのですが、そういう部分しか残らなくなってサロン化してしまうということではなかったかと考えておりまります。

都市研究プロジェクトにおける都市研究

そういう意味で、ついでにもう一つ例を申し上げます。私がこの大学に来たのは26年前のことです。昨年、25周年勤続だか何か、青島知事が書いたものを刻み込んである銀の杯をちょうだいしましたので、26年ぐらい前のことでありますが。

そのとき、都市研の前身に当たります都市研究のプロジェクトがあった。都市研究センターができるもっと前でありまして、東京都から都市研究費というお金が若干出た。そのお金を使って、5学部の先生が、つまり都市研究所なんていうものはなかったわけでして、5学部の先生で都市にかかわりを持つ研究をしていらっしゃるような方々が集まって一緒に共同研究をしようと、それを奨励するということで、研究費というのが出ていたわけです。私がここに着任しましたら、社会学には大塩先生という先生がおられまして、そういうことをやっておられまして、おまえを呼んだのは、そういう目的もあったんだ。だからその都市研究費を使って、学際的な研究をやる。だからおまえはその世話係をやれ。一緒に研究するのは、建築の高名な川名吉エ門先生のチームである。学際研究大塩・川名チームでやるから、おまえはその世話をしろと言われました。私は一生懸命文房具を買ったり、会計を記録するノートを買ったりしました。それは覚えておりますが、何を研究したかは覚えていないわけであります。なぜかと言えば、学際研究をしなければいけないというので、川名先生と大塩先生が集まって、我々はその脇に並びまして、そしていろいろな話をしまして、そしてまた一生懸命やりましょうという話をしてまた別れて、年度末になると会計の処理をしなきゃいけないから文房具を買うというようなことをしただけということになったわけであります。それで私は学際的研究なんていう言葉が出てくると、虫酸が走るわけでありまして、福岡先生に申しわけないのですが、ちょっとこういう悪口を申し上げたわけです。

何が必要かと言えば、都市はなぜ東に発展しないで西に発展するのかという問題を追究すればよろしいのであって、それは経済学だろうが、社会学だろうが関係ないというのが私の認識であります。高等遊民がどういう生活行動を持っていたのかということが問題なのであって、それを研究するのが交通工学者であるのか、あるいは文学者であるのか、あるいは社会学者であるのか、だれであるのかということを私はほとんど問題にすべきではないのではないかと思います。問題にしたとたんに学問は堕落する、そのように私は考えているわけであります。

もちろんもう少しアカデミックなあれで議論をすれば、こんなことがあるかもしれません。近代科学というのは、主として方法の違いによって学問を分けてきたと言えると思います。私は数年前に社会学の教科書をつくりまして、こんなことをはしがきに書きました。社会学とはどんな学問ですかと聞かれると、非常に困る。料理の仕方みたいと答えるほかはない。この教科書は料理教室だと思って読んでもらいたいということを書いたんです。料理の仕方という意味は、中華料理とは何かと言えば、フカのひれを使うのはほかの料理ではないかもしれないけれども、しかし大事なことは肉や魚や野菜を使って、そしていろいろな調味料を使って煮たり焼いたり切ったり混ぜたりして料理をつくるということは、どんな料理も同じであるけれども、中華料理はその切り方、混ぜ方、焼き方、揚げ方、そんなことに、何か西洋料理や

日本料理と違った特色があるのであって、材料は何であるかというようなことは問題ではない。社会学もそういうものだということを書いたのですが、すべての科学は、大体はそうなってきている。

都市研究の在り方と方法

ところが、都市学とか、都市科学とかいう言葉を使うとしますと、これは対象によって、素材によって学問の看板を掲げるということになります。それでいいのかという問題がある。

例えば自動車というものがある。自動車というのは、社会的に非常に大事なもので、自動車学というものは、普通はないことになっているはずであります。自動車がどういうメカニズムで動くのかということは、多分物理学がやることになっている。それからそこから出てくる廃棄物をどうやって少なくするのかというのは、化学の知識を用いてやるのだろうと思います。エンジンをどうやって回すかというのは、化学なんですか、物理学なんですか、私は科学の知識がないからわからないのですが。それから細かく分けていけば、自動車の車体の空気抵抗を少なくするためには流体力学とか何とかいう学問を使うのでありましょう。それから、秋山さんがおられますけれども、障害者が楽に乗れるようにするのには福祉工学とか何とかいう名前をつけるのでしょうか。そういうような工夫も要るでありましょうし。それからこれから人々のライフスタイルがどうなっているから、そこでセダンよりもＲＶ車をつくったほうがいいか悪いかということは、社会学に関係するようなテーマかもしれません。つまり自動車というものがあって、非常に大事であることについて、だれも異存がない。だけど自動車学はない。同じことで考えると、都市があって、都市にはいろいろな問題があって、取り組まなければいけない問題がたくさんあることはわかるけれども、都市学なんていうものがあると言えるのだろうか。こういう疑問が古くて新しい問題としてある。それで私が怖かったから、私が都市研におって考えていたころはアーバンサイエンシズというつもりでいましたけれども、日本語は便利なことに単数か複数か表示しない国でしたから、都市科学研究科で済んでいたわけです。

ただ、例えば伊藤先生とは、私は何十年来、いろいろなところでおつき合いをしていますし、大変勉強させていただいたし、いろいろなことを教えていただいた。議論したことがたくさんあります。さっきコミュニティの問題をお話しになりましたが、自治省のコミュニティ研究会という数十年続いた研究会でいろいろ議論しました。伊藤先生は、明治５年に学制頒布になって、全国津々浦々に１万の小学校をつくった。それと同じように、現在、我々は全国津々浦々に小学校区に１つずつコミュニティセンターをつけようではないか、そういう制度をつくろうではないかという提案をされた。私はコミュニティというのはそういうものではないと思います。そういうことをしたらコミュニティはつぶれてしまうというようなことを言いまして反論いたしました。そういうようなことを含めていろいろやってまいりましたけれども、伊藤先生と私の議論は非常に、私のためには少なくともなりました。伊藤先生のためになったかどうかはわかりませんが、世の中のためには少しはなったと思うわけでありますが。ごく最近やりましたのは、渋谷区の人口が減っているが、その区をこれから発展させていくにはどうしたらいいかという基本構想を伊藤会長、倉沢副会長でつくりましたが、そこでもいろいろな議論をさせていただきました。

そういったときには必ず問題がある。コミュニティセンターをつくるときにはそういった制度をつくったほうがいいのか、住民がつくりたいと言ったときに援助するようなシステムをつくったらいいのか。こういう具体的な問題があるわけです。そしてそれに対して、伊藤先生は伊藤先生のお考えをおっしゃるし、私は私の考えを申し上げる。それについての決定とか、それを政策に反映するとかいうのは、役所がおやりになる。いずれにしても、そういう形で具体的な問題をめぐって、その場合にはさっきの伊藤先生のお話を聞いていてもわかりますが、伊藤先生は社会学者で社会学的な用語をお使いになる、個の確立が本日の課題で

あるというような話は、社会学者は昔から言ってきたと言えば言ってきましたけれども、伊藤先生のようなパンチの効いた形でお話ができる社会学者はあまりいないと思います。とにかく問題が先行してあって、その問題のために、自分だけでやっていたのでは解決がつかんから、すまんがおまえ来て手伝ってくれという形で、協力したときに共同研究は初めて意味がある。それを学際研究というのなら、この印刷物は決して間違っていなくて、私の申し上げたのが筋違いかもしれない。つまり学際研究は結果として意味のあることで、それを目的にしてはいけないということではないかと私は思っております。

都市科学研究科への期待

ここの大学院で勉強される皆さんに、私はこれから期待を申し上げたいのです。その期待は、一つには自分の指導教官は社会学の高橋先生であるから、私は社会学を勉強すればいいなんて思って、ここで勉強なさるのは、絶対ご損ですよということです。それからいろいろな先生のお話を聞いて、寄せ集めのバラバラな知識を集めればそれでいいというふうに私もあえて申し上げるわけではない。しかし自分のテーマがあって、そして素材は自動車であったり、都市であったり何であったり、区画整理であったり、地方分権であったり、何であってもいいですけれども、それを科学が持っているさまざまなこれまで築き上げられてきた知識や方法、そういったものを上手に使ってそれを処理できるような能力が身につくのであれば、この大学院は大変な意味があるということです。

だから高山英華先生にはこういう話を聞いたことがあります。おれのところは、つまり東大の都市工学科で何も教えなかったから、だから何でもできるやつがたくさん出た。ということは伊藤先生一人を見ただけでもよくわかるわけで、あんなことをおそらく言えるような人はどこにもあまりない。だけどひところおやりになった何とかモデルで形状的に何とかするなんていうのは教わらないとできないかもしれないけれども、ほかの伊藤先生らしい部分というのは、ほとんどが伊藤先生が社会的現実の中で格闘されて、そこから獲得された知見であったというように思います。私は伊藤先生ほどの才能はありませんからだめですが、社会学ということで申し上げればこういうことです。

この間小学校のクラス会がありまして、クラス会に行きましたらば、何十年も会っていない古い友人に会いました。そしておまえがときどき新聞に物を書いたりテレビに出たりするのを喜んで見ておる。しかし見れば見るほど、社会学というのは何だかわからなくなった。社会学とは一体何だか、今度一度話をしろと言われたのです。

考えてみるとこのところ私は妙なことばかりやっているのです。北京とソウルと東京の研究が大事であるということを朝日に書きました。これはわりと真面目な話です。それから東京都のホームレス対策がおかしいということを書いて、東京都の皆さんに大変僕は嫌われておるわけでありますが、それもやりました。それから、これは朝日ではありませんが、サッカーのワールドカップを開催することの社会的意味について、スポーツ新聞にリトバルスキーと並んで物を書いている。私のところの大学院生に高校時代のサッカーの選手というのがおりまして、私がリトバルスキーと並んで新聞に写真が出ているというので、腰を抜かしました。それから極めつけは、この間、1ページのパチンコ屋の広告に写真が出ているようで、皆さんのひんしゅくを買っておるわけでありますが、これは全部実は私にとってみれば内面的に一貫しているのであります。北京・ソウル・東京というのは、現在、私どもの考えているようなマクロな都市社会学、これまで日本の都市社会学がほとんどやってこなかったマクロな都市社会学、そして経済学等々との共同で、グローバリゼーションのもとでの都市システムの形成ということを考え始めているということの一端でありまして、内容を話している時間はないのですが。

それから、ホームレスは、日本の地域社会がさまざまな異質なものを包摂し差別しながらきた社会だった。それが解体した結果生じてきたのが、包摂できなくなってそしてはみ出していった、そ

ういうホームレスの人たちの問題。これは社会学者として、放っておけないという形をとっている。

それからワールドカップは何かと言えば、川淵三郎氏、その新聞にも書いた、私はＪリーグのどこかのチームのサポーターにはならないけれども、川淵三郎氏のサポーターになるということを書いたわけでありますが、理由はこういうことであります。川淵三郎氏を含めて現在のサッカー界のリーダーの皆さんは、若いころ、サッカー留学に大体ドイツに行っている。そしてドイツの地域社会の中で、スポーツクラブと呼ばれる物的な施設もあり、そしてそこに集まる無数のクラブがあって、それぞれ自分たちのレベルと能力と興味に応じて適当なスポーツを選んで、適当にスポーツをやっている。頂点にドイツで言えばブンデスリーガですか、Ｊリーグに相当するような人間技の極致を鑑賞に耐えるようなものとして見せるような、そういうクラブもある。私の言葉で言えば、地域社会をベースにしたスポーツ文化というものがここにある。それを見てきて日本に帰ってくると、日本にはスポーツというものは大学運動部のスポーツと会社運動部のスポーツと、プロ野球しかない。そういう現実に直面して、何とか日本にスポーツ文化を根づかせたいと。そういうお気持ちでＪリーグをやり、ワールドカップを誘致をしておられる。だからヴェルディ読売か、ヴェルディ川崎かというのは、非常に重要な理念にかかわる問題である。これだけは譲れないと言って、読売新聞の社長と大げんかをしておられたわけです。

これは何のことはない、コミュニティ論だというのが私の認識であります。伊藤先生のコミュニティ論もあるし、私のほうのこれまでやってきたコミュニティ論もあるけれども、一つパンチを欠いていたのは、伊藤先生は別として、私どものコミュニティ論は、コミュニティセンターという施設ができる。そしてコミュニティというのが大事だという講演会をしょっちゅう開いて話をする。そうすると住民のまともな方が、わかった、コミュニティが大事だとわかった、我々も何かしたい、何をしたらいいんですかという。そのときに私どもは何を用意したかというと、そんなことはあなた方が考えてください。コミュニティというのは自分たちで考えたことを自分たちでやることですから、みんなで考えて、自分たちでやりたいと思ったことをやってください。こういう対応をしてきた。理論的に間違いであったとまでは思いたくないし、思っていないわけですけれども、しかしサッカーをやりながら、この指とまれというかけ声に比べたらば、何と活力のないものであるかということを反省せざるを得ないわけです。

結果として、例えば清水エスパルスというのが清水市にありますが、清水市というところは、かつて港町であるというので函館市と姉妹都市の提携をいたしました。そして、函館市民が清水のことをどのぐらい知っているかというので、清水と聞いて何を連想するかという調査をやったんです。答えは次郎長、次郎長の清水というものしか返ってきませんでした。がっくりしていたのですが、今はエスパルスの清水ということになりました。小学校の数よりも少年サッカーのチームの数のほうが多い町です。そして１年に１回、３日間かけて1,000試合以上の全国少年サッカー試合をやっているわけです。小学生がサッカーをしているだけではなくて、母親は炊き出しをするとか、全市を挙げたイベントになるわけです。

こういうコミュニティの活性化という方法論もあり得るということを、私はサッカーの皆さんとおつき合いして知り、愕然とし、自分の不明を恥じた。もっともっとコミュニティ論は考えなきゃいけないことがあるということに気がついたわけであります。

パチンコの説明をするのは、ちょっと時間がかかりますのでこれはやめておきますが、そういう意味で私は私がやっていることが都市研究であるし、都市社会学であるし、私の研究として考えて、内的には一貫しているというふうに考えておりますが、おまえの専門は魚か肉か野菜かというふうに聞かれると、全部専門だということになってしまうのですが、都市科学というのは、最初からそういう宿命を担った学問であると考えるべきではないだろうか。

社会学者として申し上げれば、農村社会学とい

うのは、日本の社会学のリーディング部門でありました。しかし現在は、ほとんど崩壊をいたしました。昔は有賀喜左衛門先生という方がいらして、有賀先生の同族団理論が外国にも知られて、外国語の辞書にDOZOKUというローマ字の単語が載るようになったわけです。さらには福武直先生といったような影響力の強い先生がおられて、農村社会学が日本社会学の中核であった時期がある。しかし現在では、ほとんど滅亡してしまいました。そして農村と都市の差が少なくなったから、それは地域だ、地域社会学というものに姿を変えたのだということを言っていますが、私はこれは敵前逃亡であると考えておるわけであります。農村社会学者がここにいらっしゃらないとすれば、そういう席で申し上げるのは申しわけありませんが、なぜそうなったかと言えば、簡単に言えば日本の農村社会学者は農業を全く知らなかったからであります。社会学は社会関係を研究する、同族関係だ、親方子方関係だ、本家と末家の関係だ、家父長的社会関係がどうだこうだというようなことばかりやっておったわけであります。

これでは今の農民には話が通じないわけで、この間、田舎で山を歩いておりましたらキノコ採りに来た農民と、近ごろどうだというような話をしておりますと、米ではだめだからリンドウをつくっております。お盆の前に出したリンドウは一箱3万円だったけれども、お盆の後で出したら、300円になってしまった。これから頭を使わなければいかんなというようなことを言っているわけであります。そういう農民の心に触れるような農村社会学ができなくなったのは、つまり農業がわからないから、彼らと話が通じなくなってしまったということであると思います。したがって、私は自分の反省の材料に考えているわけでありますが、都市社会学というのは、そういう社会関係論ばかりやっていたのでは絶対に何の役にも立たないし、何もわからない。奥井先生のような踏み込んだことをしなければいけないし、区画整理のこともしなければいけない。先ほど伊藤先生は、藤沢市の都市計画課職員を例にして話をされました。あの人たちを鍛えたおばさんたちは何によって鍛えられたかという秘密を実は私は知っているのであります。このおばさんたちは、辻堂の北部の整理の話をする、その前に辻堂南部の区画整理事業という問題がありました。

あそこは、松林に別荘地が点在する大変良好な別荘地だったのですが、戦後住宅地になった。松林を縫ってた道は趣があるわけですけれども、今では引っ越しのトラックも入らないし、消防自動車も入らない。人は道に迷うし、下水道をつくろうにも効率が悪いし、だから区画整理をするということを市は企画してやり始めました。そして、その区画整理事業に直面した方々は、最初は仰天した。区画整理とは何だと聞いて、そして減地を行って土地を少しずつ取り上げて、そしてその土地で公園や道路をつくることだという説明を聞いて、そんなのは反対だ、せっかく苦労して70坪の土地を手に入れたのに、それを20坪も削って何が環境がよくなるだ、とんでもないことだということで反対を始めました。そして、市役所へ行きました。そのころ伊藤先生のお弟子だったかどうだったかわかりませんが、区画整理課の職員はムキになって反論いたしました。あなた方は反対だとおっしゃるけれども、それじゃ公園は要らないのか、消防自動車は入らなくていいのか、下水道は通らなくていいのかという反論をいたしました。土地を取られたくない一心で住民の人たちは勉強を始めました。私はその勉強会を傍聴に行って感動いたしました。湘南のざあます奥様とでも言うべき方々が、日曜日にわざわざこういう勉強会をつくって、区画整理法なんていうわけのわからない法律の勉強を一生懸命しているわけです。社会教育課が面倒を見てくれたわけじゃないんです。自分たちで区画整理の専門家を探し出してきて、そしてその人を呼んで勉強して、土地を取られたくない一心で、一生懸命勉強いたしまして、そしてもう一遍市役所へねじ込みました。

外国にはラドバーン方式という方式があるそうじゃないか、住宅地の道はくねっていたほうがいい。そういうような過程を経て、これは詳しく後の経緯を申し上げる必要はないと思いますが、伊藤先生を驚かせるようなオバタリアン軍団が発生

したのであると私は思うのです。ですからそういう意味では、伊藤先生と全く同じなのは、大学院や大学へ行って勉強する人だけではなくて、土地を取られたくないとか、そういう動機がきちんとあれば、そういう人たちも一生懸命勉強するのだということで、その勉強会が終わって、三々五々帰る奥さん方と話し合って、これまた私が言ってきたことと一致したから感動したというのは、何か思い上がった言い方ですが、感動いたしました。

こういうことをおっしゃいました。隣の奥さんはいつも最新流行の服を着て、しゃなりしゃなりとお出かけになる。私とは人種が違うと思っていた。ところが、今度こういうことが起きて署名を集めるとか話し合いをするようになった。そうしたら隣の奥さんがおっしゃるには、実は、牛込に住んでいたころは、子どもがぜんそくになって、空気が悪いせいであると思ってこちらへ引っ越してきた。区画整理なんて難しいことはわからないけれども、しかし、16メートルの道路が通れば子どもがぜんそくになって困るというので心配になって参加した。そういう話を聞いて、何だ隣の奥さんも私と同じ子ぼんのうな一人の母親だということがわかって、それからはあいさつもするようになったし、いろいろな話もするようになった。私も区画整理なんて難しいことはあまりよくわからないけれども、でも参加してよかったと思っている、こういう話でした。

ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、この辻堂南部の区画整理をめぐって反対した住民のリーダーの皆さんは、区画整理を大変よく勉強されて、区画整理はどこがおかしいかという本をつくられた。建設省の区画整理課に配属になった職員は、まずこの本を読んで、区画整理に住民はどういう理由で反対するのかということを勉強している。その次に建設省のお役人が書いた逐条解説を読んで、その両方を卒業すると、ようやく区画整理課の職員として一人前になるという話です。

これは多分間違っている点をたくさん含んでいるけれども、しかし、にもかかわらず大変すぐれた学問であったと思うわけです。都市科学研究科というのは、そういう学問をする人が、いろいろな人が出てくるところであってほしいという願望を申し上げておきます。

ごらんのように、伊藤先生の話を聞けば伊藤先生は建築学科のご出身、その前に農学部ご卒業であるから、最初から広い方でいらっしゃるという、型にはまらない日本をリードするすぐれた学者でいらっしゃる。それからここの前所長の石田先生、これも高山先生の左腕のほうでいらっしゃいますけれども、単なる建築学科の出身者であったり都市政策の歴史の研究家である以上の学者でいらっしゃる。生意気ですけれども、私も単なる社会学者以上には学制の制度も勉強しましたし、都市計画のことについても多少かじりました。しかし、私どもの世代には、どうも限界がある。最後のところに行きますと、伊藤先生もああいうことをおっしゃるけれども、最後のところはエイヤッと図面をお書きになるところまで来てしまうわけです。伊藤先生も途中までは倉沢は話せるやつだと思って話をしておられるのだけれども、最後のところに来ると、おまえはやっぱり社会学者だなあ。

この前、神戸のあそこへ集まったボランティアの人たちがどこから来たのかデータが欲しいというようなことを言って、データがなかったら調べなきゃいかんというようなことを言っていましたら、それは倉沢さんがやることだと伊藤さんがおっしゃってくださったわけですけれども、やっぱり地は争えないといいますか、どうしても私どもはつけ焼刃で、いくら総合的な視点だ、学際的だとか何だとか言いましてもつけ焼刃でありますが、本質的にスタートの時点からそういう自分の生まれ故郷を離れても物が言え、仕事ができる。そういう研究者が育つ可能性というものにかけて、この都市科学研究科というものが必要だったわけでありますし、そういう思いが、要路の方々にも通ずることができたわけであります。

そういう期待を担って、皆さんはある意味では鬼っ子でありますけれども、ある意味では力を担って、この都市科学研究科に入って来られた皆さん方であると思いますので、今の経緯の話は忘れていただきますが、最後のことだけは頭にとどめていただいて、そしていい仕事をしていただきたい、

そのように思います。

4時をちょっと回って恐縮でありますけれども、

それではこれで終わります。(拍手)